同窓生の広場

回想

中野　茂

私の十代は、夢中で駆け抜けていった時代かなと思います。

当時は自然が豊かで、四季おりおりの季節に合った遊びを創意工夫した集団遊びが中心でした。又疎開して来られた友だちとの出合いもありました。食糧難の時代であったので食べられるものは何でも食べました。戦後復興はめざましく、子供たちの生活環境もさまざまでありました。

私の二十代は真剣に将来を考えた時代でした。教員採用試験が初めて実施されたのは一九五七年（昭和三十二年）でした。当時教員養成の大学に在学しているわれわれに教員採用試験を実施することはどういうことなのか、そんな議論もされていました。

殊に卒業の式辞の一部分だけは記憶しています。それは、就職したならば十年はその職場に勤めなさい。そうすればその職場には、いなくてはならないような人になるという、非常に意味深い話でありました。

もう一つ、新任教員研修会に参加したときのことも。これは、とりわけ忘れられません。

「紅い夕陽が　ガードを染めて
ビルの向うに　沈んだら　街にゃ
ネオンの　花が咲く　俺ら貧しい
靴みがき　ああ　夜になっても
帰れない」

これはご存じの宮城まり子の歌った「ガード下の靴みがき」です。一九五五年（昭和三十年）頃にヒットした曲です。

新任教員としての緊張感、これからの教職への道を歩む不安等を抱きつつ、このレコード鑑賞から研修が始まったのは圧巻でありました。

戦後復興の狭間に取り残される戦災孤児の未来に、夢や希望を託す時代でもあったように思います。さまざまな生活環境に置かれている子供への理解を促す意図を伺うことができます。新任教員としての心得として、どの子にも光と幸せをという願いがあったと思います。

どの年代もあっという間に過ぎていきます。行きたい場所があるなら行ったほうがいい。会いたい人がいるなら会うほうがいい。やりたいことがあるのならやってみるほうがいい。

人生は思ったより短く、いつ終わるのかも分からないから。

（昭和三十二年卒）

教員への道

島村　憲子

高校進学をめざし受験勉強をしていた中学三年の冬、私は中心性脈絡網膜炎という眼の病気になりました。現在、この病気はレーザー治療や良薬もあり恐れる病気ではありませんが、六十年前の医学では失明にも繋がる心配な病気でした。

その後、無事、高校に入学したものの眼病は治らず、大宮の日赤病院に週三回の通院となりました。医師からは安静と休養を求められ、体育や学校行事等、全て見学、修学旅行も不参加になりました。

そんな私に教員の道が開けたのは、三年の担任A先生のご指導があったからです。

授業時数の確保が心配される中、A先生は、埼玉大学教育学部小学校課程の受験を勧めてくれました。眼を休めるため、長時間勉強をする事が禁止されていることを相談すると、苦手な数学については二冊の問題集を完璧にマスターするようにと、具体的に教えていただくことができました。また、冬休みには補習もやっていただきました。自信は無かったものの先生の熱意に応えなければと思い、眼を休めながら勉強し、なんとか大学に合格することができました。

大学に入学してからも眼の病気に大きな変化はありませんでした。しかし、学生生活を楽しんでいた三年になって今度は網膜剥離が発病、東京大学附属病院に緊急入院、手術を受けましたが、結果は再手術、入院は二ヶ月にも及びました。

その間、同級生のIさんは、私の卒業に支障がないように幾つかの講義内容をノートに書き移したり進捗状況を知らせてくれたり、常に支えてくれました。

今では、講義内容をメールで送ったり、リモートで授業を受けたりできますが、コピーも青焼きが主流の時代、彼女の苦労は並大抵なものではなかったと思います。

このお二人のお陰で私は教員となり、三十八年間の教員生活を送ることができたのです。

退職後、恩師のA先生とは偶然にも四十五年ぶりに人権擁護委員として一緒に仕事をすることになりました。これまでに何の恩返しもできませんでしたが、高校時代のご支援にお礼を述べると、先生は「担任として当たり前のことをやっただけ」と昔と同じように穏やかに笑っておられました。

（昭和四十四年卒）

老にして学べば…

小川　詠二

大学を卒業して今年は節目の五十年目、現在は専門の数学と趣味の書道を軸に、日々悠々自適とも思える生活を楽しんでいます。

よく人から、「数学と書道を？」と驚きの表情で言われます。しかし私は文字を書く際、数学の図形的要素を視点としており、とても役に立っていることを実感します。

例えば、㈠文字の概形をみる。㈡線の長さや傾き、方向をみる。㈢線の起筆、収筆の形や角度をみる。㈣線の交点が線をどう分けるかをみる。㈤文字の中心をみるなどの他、垂線を下したり、面積も考えたりして文字を観察します。

また、抽象性や美の追究も共通項でくくれそうです。

さて私は現在、日本書道美術館講座「書道大学」二年生で、卒業の年となります。

講座内容は、漢字、仮名、写経などの実習と講義となります。月一回の日程ですが、その他にも宿題や課題も多く、全国の検定試験や展覧会への出品もあり、私にとってはハードなものとなります。しかも、この原稿を書いている十月には、卒業認定の筆記試験を終えたばかりでした。

試験内容は九月に発表され、書の歴史や古典について、楷書、草書、変体仮名に直すことです。

「なぜ筆記テストがあるの？」と不安を募らせ　ネガティブな気持ちでいっぱいでした。しかし、テストに向けやる気のスイッチが入り楽しく充実した準備ができました。その成果をまとめます。

一つ目、書の歴史や古典について、何度読んでも内容が頭の中で定着しないのです。そこで、中国と日本を横に並べた自作年表を作成、能書家達の生きた年代を線分で表し関係が分かるように工夫したことで理解が一気に増しました。図の活用は実に効果があります。

二つ目、友人と共にテスト対策を実施、結果、自分の不足や課題も見つかり、その後の学習への意欲につながり、これも有効でした。

最後に、孔子の言葉に「学びて思はざれば則ち罔し、思ひて学ばざれば則ち殆し」があります。学ぶと思うは、両者が一体となって生成発展していくと実感しました。書の歴史を学ぶ中で、遣唐使が中国の書の文化（唐風）を持ち帰り独自の日本風（和洋）を加え、それを完成（仮名）させた人達の開拓精神、創造への挑戦に強い感銘を受け、感動したことです。

言志四録に「老にして学べば死して朽ちず」とあります。少しでもそれに近づくべく、自らの学びを続けていきたいと思います。

（昭和四十九年卒）

入学から五十年

馬場　弘昭

昭和四十八年、埼玉大学に入学してから早いもので五十年がたちました。私は専攻が小学校教員養成課程でしたが、内部試験を受け中学と高校の免許も取得しました。

小学校と中学校の教育実習を経て、小学校の教員を選びました。理由は、あどけない小学生に音楽や体育など多くの教科を教えることができるからです。

大学を卒業して東京都北区の小学校に赴任いたしましたが、校長に依頼され、いきなり六年生の担任を任されたことを今でも鮮明に記憶しています。六年生は陸上記録会や水泳記録会があり、児童と一緒に走ったり泳いだりしました。また当時（昭和五十三年）から私立中学校を受験する児童が多く、冬休みも内申書を書いたら終わっていたという状態です。右も左も分からない新卒でしたが、校長を始め教務主任、学年主任等かなり熱心な方ばかりで大変励ましていただきました。教員は授業の準備等、時間がいくらあっても足りません。平日は夜まで、土日も休まず授業探究に没頭いたしました。卒業式の時は、一年間全身全霊で打ち込んできたため過労状態でしたが、何とか無事に卒業生を送り出すことができました。その後、中学年、低学年の担任を経て七年がたち、文京区の小学校に転任いたしました。最初は三年生の担任でしたが、学級数の関係で音楽も担当いたしました。クラスの歌などオリジナル曲を作り、児童と毎日歌った事を覚えています。当初、専科は音楽・図工・家庭科でしたが、私に理科専科を引き受けて欲しいと強い要望があり、担任の後、理科専科を二年間受け持ちました。

北区・文京区と通算で十一年間教員をしておりましたが、平成元年三月に退職し、会計簿・法律・経済を学び、平成七年から税理士として歩むことになりました。

以来、二十八年間、スタッフと共に法人や個人の会計・税務の仕事に勤しんでおります。

新型コロナになる以前は、文京区の小学校・中学校等で租税教育を行い、多くの学校で児童・生徒に税金について学んでもらいました。現在は、新任の税理士に授業を担当してもらっていますが、子供から大人まで税について知っていただこうと、日々活動しております。

最近は電子化の波が電子申告・電子申請を加速させていますが、ＡＩを初めとする先端技術を上手に活用して、納税の効率化を図っていきたいと考えております。

（昭和五十三年卒）

教員生活を振り返って

野口　久男

現在、教育界では深刻な教員不足が大きな課題となっているとのことです。教員という職業に魅力を感じにくくなっているようです。

私は、そんな話題を新聞やテレビ等で目にすると、自分の教職生活に思いを馳せることがあります。

私は、中学校、高等学校時代には、なぜか英語という教科が好きでした。

大学進学の際には、私大の文学部英文科や国立大学教育学部の中学校教員養成課程「英語科」を受験し、「将来は英語の教員になればいいな」という漠然とした希望をもっていました。その結果、ある私大の英文科に合格したのですが、残念ながら埼玉大学教育学部中学校教員養成課程「英語科」は不合格でした。しかし、（当時埼玉大学教育学部受験の際には、第二希望を記載することになっていたと記憶しているのですが）私は、第二希望に「小学校教員養成課程」を記入していて、小学校教員養成課程「広域専修」で合格という通知をいただきました。

ここで、少し悩みましたが、埼玉大学では副免で中学校と高校の「英語」の免許が取得できることを知り、経済的に負担の少ない埼玉大学への進学を決めました。

卒業時には、何とか中学校と高校の英語の免許を取得したのですが、採用試験では、英語科の採用人数が少なく、英語教員への未練はありましたが、結局、埼玉県小学校教員の採用試験を受験し、採用されることになりました。

それからは、小学校の教員として定年まで勤めることができました。途中、市や県の教育委員会に指導主事等で勤務する機会もありましたが、小学校で多くの子供たちと出会い、充実した教員生活を送ることができ、教え子や教員仲間への感謝の念にたえません。

担任した教え子の中に結婚式に招待してくれる人がいたり、中学校の校長となって挨拶に来てくれる立派な人格者がいたり、時にクラス会に招かれたりと、今では、小学校の教員になり本当に良かったと思っております。また、一緒に働いた教員仲間とも時々お会いする機会があり、思い出話に花を咲かせています。元々中学校の英語の教員を希望していた自分が、いつしか小学校の教員の楽しさを味わっていたのだと思っています。

教員というのは、生涯にわたって多くの人とのつながりをもてる素晴らしい仕事だと、退職して五年経とうとしている今、実感しているところです。（昭和五十六年卒）

日々本物を創る

藤川　英子

学制頒布以来百五十一年目、昨年度、百五十周年記念事業を終え、学校教育目標も改正し、勤務校は新たな一歩を踏み出しました。

周年行事では歴代ＰＴＡ会長が実行委員を務め、学校全体にプレゼンテーション。実現したいことを収集し、一つ一つの思いを形にしていきました。地域主体に力を最大限に発揮し、学校・家庭・地域の壮大なＰＢＬ（課題解決型学習）を実現。歴史と伝統は継承者がいないと存続しないこと、システム構築の重要性を再認識しました。

学生時代は苦学生でバイトづくめ。高校受験生の家庭教師をはじめ約十五種類を経験。大学では数学が学びたくてほとんどクラスにおらず、二刀流。サークルは少林寺拳法部、学部を越えて豪快な先輩に恵まれました。授業料免除制度も活用し、そのおかげで今があると言っても過言ではありません。

教育実習は附属小学校に五週間。深い教材研究と卓越した指導力で、子供と共に創り上げる、まさにプロフェッショルな質の高い授業の連続。ここでの経験が、その後の長い教員生活の指針となり、「いつか、このような授業を全教科でやってやるぞ！」と生意気ながら思いました。本物を見ることは非常に重要で、どんな子供にも、今は分からなくとも必ず活きる時が来るから「常に本物を」を大切にしていきたいと考えました。

ところが、教員採用試験は、突然の氷河期。小学校十八倍という難関。クラスで現役二名のみの合格でした。まさか一緒にやってきた仲間が別々の道とは。その友人たちの分まで頑張らねばという強い思いで教職に就きました。

学級担任として実践したいことは全てやりきってから、母校大学院へリカレント研修。音楽、とりわけ歌声は、学級経営と深く関わっているという自分自身の実践を理論に結びつけるとともに、世代の異なる貴重な友人を得ることができました。この間、子育ても介護も、無我夢中で乗り切りました。

現在、昨年度から埼玉県音楽教育連盟長として、県内音楽教育の推進を担っています。大学時代の友人は「まさか、あのふくこが？」と思うことでしょう。そして、働き方改革の推進に鑑み、事務局をさいたま市及び県内東西南北の各地区に移管し、県全体の真の音楽教育の推進に邁進しています。

現勤務校では、最先端ＩＣＴ教育、文部科学省「教員研修の高度化モデル開発校」として、教職員共々、子供ファースト、本物を創る授業の探究の毎日です。

（昭和六十一年卒・平成十四年修）

至上の喜び

駒崎　弘匡

学校現場では、教員の大量退職に伴う世代交代で、若手教員が急激に増加しています。その一方で、若手教員の離職の増加とともに、人員の確保で苦労している学校も多いのが現状です。

私の大学時代は教員になりたくてもなれなかった時代でした。大学時代に仲がよかった仲間は、全員それぞれが別の業界に就職をしました。その仲間とは定期的に会って情報交換ができる関係が今でも続いています。近年は今の学校現場の現状を心配してくれる仲間もいるのですが、教育実習での学校現場の経験しかない仲間から、「教員は年をとっても教え子との関係が変わらないところがいいところだよね」と言われたことがあります。

思い返せば、約二十年ほど前に担任した教え子から久しぶりに年賀状が届いたことがありました。その年賀状には、「本を出したので送ります」という内容が書かれてありました。そして、数日後にその教え子から一冊の本が届きました。その教え子は、大学院で熊の研究に取り組んでいて、一つの研究がまとまったとのことで報告をしてくれたのでした。

その教え子は、小学生の頃からやさしい性格で動物好きでした。幼少期からの夢である動物博士の実現に向け日々邁進中とのことでした。夢に向かって力強く生きている教え子がいるということは至上の喜びでした。

教員の日常は多忙です。学習指導、生活指導、学校行事、保護者対応等。その他に外から見えない事務も多いです。分掌に応じた仕事もありますし、出張もあります。新たな学習内容や指導方法に対応していくために研修も必要です。そして、児童生徒の成長は必ずしも滑らかなものではないことから、児童生徒を見守り導きながら、教員もまた悩み苦しむことも多いです。それでも教員が頑張れるのは、気持ちがどきどきする楽しみがあるからではないかと思います。日々の授業やクラブ活動、部活動、学校行事等の学校生活で、児童生徒はどきどきする体験をしていきます。どきどきするたびに児童生徒は大きく成長していきます。教員も一緒にどきどきします。そして、児童生徒の伸びる瞬間に立ち会えることは、教員にとって至上の喜びです。

教職の魅力を感じて教員の志願者が増えること、若手教員の離職が減ることを願います。

（平成元年卒）

「音楽科教師」としての原点

佐藤　太一

佐藤　太一

教育学部　中学校教育教員養成課程
音楽専攻卒業
埼玉県立和光養護学校教諭

埼玉大学教育学部では、多くの教員免許状を取得することができます。これは、何の先生（小学校・中学校など）になりたいか、という際に選択の幅が広がります。私の大学での４年間は、教師になるための素晴らしい準備期間でした。大勢の人と出会い、多くのことを学び、自分の教育観は変化したものの「教師になりたい」という気持ちは一層強くなりました。埼玉大学では、教師になるための手がかりが、必ず見つかるはずです。

右は、「卒業生からのメッセージ」として、埼玉大学紹介パンフレットに掲載されたものです。

私の人生において、埼玉大学はなくてはならない存在です。学生時代、教育実習で附属小・中学校で御指導をいただき、教師になって初任校は養護学校勤務でしたが、公立中学校を経て、附属中学校で音楽科教諭として十一年、主幹教諭・副校長として三年間お世話になりました。

埼玉大学で様々な人と出会い、多くのことを学ぶ中で音楽に対する意識は大きく変化しました。「音楽は自分のためのもの」という考えから「音楽は全人類のためのもの」という考えに変わったのです。「一人でも多くの中学生に音楽の素晴らしさを伝えたい。必修授業が中学校三年生で終わる状況の中、中学校の音楽教師は生涯音楽と豊かに関わり続ける人間を育てることができる最後の砦」ということを常に念頭におき、熱い気持ちで大学生活を送り、努力していたことを思い出します。

現行学習指導要領の全面実施から四年が経ち、次の学習指導要領改訂が見えてきました。この時期になると、いつも気になることがあります。それは、「『音楽科』が必修教科として残れるか」ということです。次期学習指導要領では、子供たちの特性や関心に応じた教育の個別化が進むことが示されています。また、皆と同じことができるための基礎学力だけでなく、多様な他者と共生するための、「共生の作法」としての基礎学力を身に付けることが学校教育には求められます。

これは、目に見えない音楽を媒体として自己の知性と感性を働かせ、他者と協働しながら物事を捉えていく「音楽科」の目的と合致します。次期学習指導要領改訂は、コロナ禍で悪者になった音楽科の汚名を返上するチャンスだと期待しています。

これからも、御指導いただいた皆様に感謝し、全力で学び続けていきます。最高の音楽科教師になるために。

（平成十二年卒）

時代の変化に合わせて

南　登志正

私は、埼玉大学を卒業してから一年間の臨時採用期間を経て、教員採用試験に合格し、今年で教員歴十八年目となります。一般的にはベテランになるのでしょうか。しかし、昨今の目まぐるしい時代の変化においては、ベテランを名乗るのもおこがましいのではないかと思っています。というのも、私が勤める小学校の現場において、新型コロナウイルス感染症に対応するため、一気に進んだＩＣＴ活用やオンライン授業、ブラックと呼ばれる教育現場の働き方改革を進めるために導入される、集金や連絡システムのアプリ利用、通知票の簡略化、ティーチングからコーチングマインドへの変換など、常に新しい技術や価値観が台頭してきているからです。それらに対応していくという意味では、私はベテランではなく、若手の方々と同じスタートラインに立っている、むしろ、今までの古い価値観が染みついている分、マイナスからのスタートかも知れません。

小学校の現場に一人一台端末が配置され、国をあげてＩＣＴを活用していこうというときに、「自分はチョーク一本で授業をしてきた。これからもそれを変えるつもりはない。」とおっしゃる先生がいらっしゃいました。今までの方法で成功体験を積んでいると、新しい方法を受け入れることが難しい方もいます。そういった方の今まで成し遂げてきた功績は認めつつも、新しい風を入れていく温故知新の精神で職場を調整していくことが今の自分の役割だと思っています。

私は、中学生の時には剣道部の部長を務め、高校生の時にも空手部の主将を務める等、武道の道を歩んできました。剣道の稽古では真夏でも水分を摂らずに練習をしたり、空手では雪の中、裸足で稽古を行ったりしました。今の時代においてそのような練習の仕方はナンセンスであり、効率よく練習をこなしてレベルアップすることが求められています。二〇二三年の全国高校野球選手権大会で優勝した慶應義塾高校は、意味のない長時間の練習をせず、選手たちが自ら考えた効率の良い練習を行い、日本一の栄冠に輝くことができました。まさにそういった時代の変化を体現してくれた良い例ではないでしょうか。

私自身、これからも、変化し続ける世の中に適応するための柔軟さを常に忘れずにいたいと思っています。

（平成十六年卒）

恩師、仲間の存在

大関　さわ子

今年の夏に、教育学部家政専修（現生活創造専修）の恩師島田玲子先生をお招きし、当時の研究室の仲間で食事会を行いました。

「実験室に早朝集まって実験したよね。」「調理実習が楽しかったよね。」「大学近くのスーパーで、調理実習の買い出しをしたよね。」などと、当時の思い出話や近況報告をし合いました。卒業後もずっと教員を続けている人もいれば、企業に就職した後、教員になっている人もいました。親として、立派に子育てを頑張っている人もいました。それぞれの場所で、それぞれが活躍している話を聞いて、私も自分なりに人生を楽しんでいこうと元気をもらいました。

食事会の中で島田先生が、私たちが卒業の際にお渡しした寄せ書きの色紙を見せてくださいました。大切に保管していてくださったとのことで、胸がとても熱くなりました。と同時に、当時の光景がたくさんよみがえってきました。その中で、私が教員を本気で目指そうと思ったきっかけの一つを思い出しました。

大学三年生の時の附属中学校での教育実習の出来事です。研究室の仲間四人と同じ時期に参加しました。実習中に担当させていただいた授業では、私は生徒を目の前にして緊張し、思うように授業ができませんでした。そんな中、授業を笑顔で展開し、楽しそうに生徒と学び合う友人の姿がありました。自分もこんなふうに頑張ってみたいと感じ、教員を本気で目指そうと決意したことを思い出しました。その後、採用試験の勉強を始めましたが、同時期に頑張る友人の姿は私にとって常にいい刺激となっていました。あの時の仲間の存在がなければ、現在教員になれていないと思います。

卒業後は、中学校技術・家庭科の教員として採用され、現在は、新座市の中学校に勤務しております。二年前までは、ご縁があって、附属中学校に勤務していました。附属中学校在職中には、島田玲子先生をはじめとするたくさんの大学の先生方に支えていただきながら、授業研究を行わせていただきました。教員としての教科指導の専門性の大切さを改めてご教授いただき、大変勉強になる五年間でした。私にとって大学時代の恩師や仲間は、現在の私を支えてくれる大切な存在です。

来年度は、私たち平成二十一年卒業生の卒業十五周年同窓会が行われます。たくさんの同窓生や先生方とお会いできることを楽しみにしております。

（平成二十一年卒）

保健室を飛び出して

内田　貴美子

養護教諭として現場に出てから早十年。現在は、ご縁をいただき、四年前から埼玉大学教育学部附属中学校に勤務しています。

養護教諭を目指すきっかけとなったのは、高校時代の剣道部の監督の一言でした。勉強そっちのけで、毎日剣道に打ち込んでいた頃、進路選択で迷っていると「内田は養護教諭に向いていると思うよ。」と声を掛けてくださいました。

埼玉大学では、養護教諭養成課程や剣道部の先生と先輩方、そして多くの仲間との出会いがありました。そこでは、今の私に繋がる「人と関わること」の大切さを学ぶことが出来ました。

現場に出てみると、保健室には日々、様々な理由で子供たちが来室します。教室、授業、部活動など、あらゆる場面で輝いている子供たち。時には疲れてしまって、休みたくなるのも当然です。そんな子供たちですが、卒業式の後には「先生、学校に僕の居場所を作ってくれて、ありがとうございました。」と言いに来てくれる子もいます。また、「保健室に来ると、なんだか元気になるんです。空気がいいのかな。」と言う子もいます。（それは、コロナ禍で手に入れた高級な空気清浄機のおかげでは？）

理由はどうであれ、保健室という場所が、子供たちにとって安心できる場、心身ともに休むことができる場となっている時、保健室の役割や重要性を改めて実感します。

ところで、私はいつも保健室にいる訳ではありません。授業中に廊下を歩いていれば、「また散歩ですか？先生、暇なんですね。」と言われるほどです。

念のため弁解しておくと、決して暇を持て余している訳ではありません。しかし、一歩、保健室を出れば、保健室に留まっていたら見ることの出来ない子供たちの表情や一面を知ることが出来ます。

最近は、銀木犀の花言葉を教えてくれる子、プロ野球の熱い場面を語ってくれる子、夕焼けを見ながら「綺麗だなあ。」と微笑む子に出会うことが出来ました。

何気ない日常の些細な一コマかもしれないけれど、こんなふうに小さなやり取りを重ね、お互いを知っていくことが、「人と関わること」の素晴らしさなのではないか、と私は考えます。そして、その関わりが、今度は「人との繋がり」を生み出すのだと思います。

人間関係の希薄化が叫ばれる世の中ですが、現場で聞こえてくる「人との繋がり」を求める子供たちの声。だから、私は今日も保健室を飛び出して、子供たちとの繋がりを探しています。

（平成二十六年卒）

学び続けた先に

山岸　実桜

私は、現在音楽科の教諭として県内北部の高等学校に勤務しています。初任校で五年目を迎え、二周目の担任をしながら日々生徒との時間を過ごしています。しかし、慌ただしい毎日を過ごす中で、なかなかゆっくりと自身を見つめ直す時間というものがないまま五年目を迎えてしまったように感じています。そのような中で受講した五年経験者研修が、私にとって多くの気づきや学びを得られる貴重な時間となりました。

音楽科の教員は基本的に一校につき一人しかおらず、他校の先生方に相談はできるものの、直接顔を合わせられる機会も限られてしまいます。また、同じテーマや視点で授業や生徒対応について考えることも普段の学校生活の中ではままならず、授業改善にも苦労をしていました。

五年経験者研修の中の教科研修では、勤務校の違う教員同士が二人組となって授業を作り、ＴＴ形式で中学校の先生方や他校の高校生に対して実際に授業をしました。授業づくりの中で、互いの学校での苦労や授業で行き詰ってしまいそうなところを話し合ったり、何より同じ目線で授業を作れたりしたことが、私にとってとても貴重でありがたい時間でした。また、同じ研修を受講している先生方の授業に対する工夫や視点が大変勉強になったと感じています。そして、たった三回という研修の中で、温かい言葉を私たちにかけ、「教える」ということをその姿で示してくださった指導主事の先生にもとても感謝しています。人柄の温かさや「わからない」という気持ちに寄り添う熱心さに感銘を受けました。

五年という歳月を過ごす中で、仕事にも慣れ、自ら企画して積極的に物事に取り組む場面が増えたように感じます。その一方で、自身の授業力や生徒との向き合い方に首をかしげてしまうことも多々ありました。今回の研修の中で「五年後、十年後の自分を作るのは今の自分であり、今後大きく伸びるかこのまま成長が止まってしまうのかも今の自分にかかっている」という言葉を聞き、改めて忙しさ・慌ただしさを理由とせず学び続けることが大切だということを感じました。学び続けた先にどうなっていることが正解なのかはわかりません。正解はないのかもしれません。ただ、今の自分の力に胡坐をかくのではなく、謙虚さや誠実さを持ち、学び続けながら私自身も成長できる教員でありたいと強く思っています。

（平成三十一年卒）